様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１３５５２

研究課題名（和文）非直線型キャリアに着目した教職の多様性と多義性に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Diversity and Ambiguity of Teaching Profession: Focusing on Teachers with Non-Linear Career Transition

研究代表者
白松　賢（SHIRAMATSU, SATOSHI）

愛媛大学・教育学研究科・教授

研究者番号：１０２９９３３１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、非直線型キャリアを有する教員に着目して教職ナラティヴの質的研究の方法論上の可能性を明らかにすることを目的とし、非直線型トランジションのキャリアを有する教員へのライフヒストリー調査、教職キャリアイメージに関する日台比較調査などを実施した。この結果、研究の知見には、第一に教師の成長に関する語りが個別的関係的な文脈でしか正当に示され得ないこと、第二にその限定性が教師の資質能力向上を求める教育改革の支配的言説と絡まって教職の不確実性を強化していること、第三に日本における教職意識への教師批判言説の影響の強さ等を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、教師の非直線型キャリアに着目して「教師の成長」という前提や教師批判言説の問題を明らかにすると同時に，解釈学的アプローチの必要性と方法的規準を示し、教師研究の豊穣化の可能性を拓いたことに意義がある。また教師の資質能力に関する指標策定義務や可視化を言及する教育改革が、かえって、教師の不確実性を増大させ、教職への負のイメージを増大させていることを例証した。これは教師の仕事や生活の不安や困難さに目を向ける教育改革の必要性を指摘しており，ここに社会的意義が認められる。研究の成果は日本教育社会学会や日本子ども社会学会の研究紀要に査読論文として採択されており，学術的な意義が認められている。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to identify the methodological effectiveness of a qualitative study on non-linier transition teachers’ narratives. This study conducted a life history survey for teachers with non-linear career transition and a comparative survey on the teacher career images between Japan and Taiwan. The study has some important implications. First, the reality of "teacher growth" is an individual and relational reality that is constructed when the concept of "teacher growth" is used.　And the adjustment of oneself to meet the social expectations of teachers and the changes in the cognition of one’s social self are contextually constrained by changes in positions, ages, and other factors. Second, the dominant story in educational reform, which requires teachers to improve their practical abilities, has increased teachers’ feelings of uncertainty. Third, “blaming teacher discourse” had a strong influence on teacher applicants’ consciousness.

研究分野：教育社会学

キーワード：教職　教師　ナラティヴ　キャリアイメージ　ライフヒストリー　解釈学的アプローチ　質的研究

１．研究開始当初の背景

2000 年以来,「優れた教師の養成」というテーマは，教育改革の中心的な課題となってきている。その背景は,「教師の資質能力低下」言説の隆盛にある。1980 年代の体罰・校則批判, 1990 年代のいじめ・不登校の社会問題化，2000 年代以降の教師の不祥事報道等において，教師の人間性や指導力に厳しい目線が向けられるようになってきている。この問題は山田(2013)に詳しいが，欧米における教育の市場原理主義化・成果主義化でも，この言説は教師をみるまなざしの重要な準拠枠となっている(Kumashiro2012)。特に「教師の資質能力低下」言説（Blaming Teacher Discourse）は，保護者と教師のリアリティ分離を引き起こしている。学校で児童生徒の問題が生じる（例えば，不登校が発生する）と，保護者は「学校の指導に問題がある」と捉えやすい。そして児童生徒の問題が学校で生じるたびに,「教師の資質能力の低下」という保護者の日常的推論により，その言説が常に強化され続けるのである。それゆえ，こういった教師への厳しいまなざしは，教育改革下でトートロジカルに強化され続けている。

この社会問題化と同時に展開されてきた公教育の市場主義化・新自由主義化は，高等教育段階の教員養成改革に一定の影響を与えてきている。特に国立大学の独立行政法人化以降，教育予算の競争的資金化を伴い，成果の説明責任を踏まえて教員養成の質保証が強く叫ばれるようになった。その一例が，教員養成スタンダーズ等の指標策定や実践的指導力育成の可視化等である。これらの教員養成系大学・学部の取り組みは，教育公務員特例法改正（第 22 条 3 の「資質の向上に関する指標」策定義務）に帰結している。

この教育改革の動向に対しては，例えば，規格化・非学問化による教員養成の質的低下の問題が指摘されている。また教師の専門職性からみた場合, 指標化や実践主義化については,「『実践的指導力』の内容が暗黙知を含んでいるために,『専門的知識は何か』という問題を巡って隘路に陥る危険性」（油布 2013，485 頁）も指摘されている。

指標化や実践主義化のもう一つの危険性は，教師の多様なライフへの配慮のなさである。近年の教育改革には,「よい教師を養成し，研修するべき」という規範的判断とともに,「教師の成長」をアカウンタブル（説明可能）なものと捉える想定がある。「教師の資質向上を目指す政策動向を背景として，教師が教職経験の中で様々な力を獲得していく過程を探究し，モデル化する試みの多くは，行政研修の体系化等には貢献したが，教師の成長を支援するという観点からは必ずしも十分なものではなかった」（安藤 2000，99 頁）。様々な研究が指摘するように，直線的右肩上がりに教師の資質能力が向上する訳ではない。ところが，近年の教育改革以降，この成長をいかに達成するか，という実証的な研究が増加しつつある。特に教師のライフヒストリー研究が指摘するように，教室の中でいかに不安を抱え，教師が仕事をしているか，に配慮した教師研究は非常に少なくなっている。そのため，教師の多様な仕事や生活の在り方，心配，不安といったネガティヴな領域や多様な私生活をも包含する教師研究も重要な意味を持っている。こういった教師研究が重視されない背景には，第一に，一人ひとりの教師に着目する研究の意義が十分に検討されていないことと，第二に，少数に着目する質的調査の方法論が十分に検討されていないことがあげられる。

２．研究の目的

本研究は，非直線型キャリアに着目したライフヒストリー研究により，教職の多様性と多義性を記述し，直線型成長モデルに基づく教員養成マスターナラティヴの課題を明らかにすることを目的としている。目的を達成するために本研究では，次の三つのサブテーマを実施した。第一が文献資料をもとに，非直線型キャリアの定義とライフヒストリー研究の分析枠組みの確立である。第二が非直線型キャリアを辿る調査協力者へのインタビューから，ライフヒストリーにみる教職の多様性と多義性を解釈=記述することである。第三が混合法を用いた総合的な分析から，直線型成長モデル・ストーリーの課題を明確化し，多様な教員養成モデルの可能性を提示する。なお本研究を通じて，少数サンプルを対象とした質的研究の意義と方法を明らかにする。この調査=記述法の確立により，臨床的アプローチによる教職研究の豊穣化をさらに促進することを目的としている。

３．研究の方法

本研究では，主たる調査として，非直線型トランジションの経歴を持つ教師を対象としたライフヒストリー調査を実施してきた。非直線型トランジション調査（1）では，若年層教師（海外日本人学校でキャリアをスタートさせた教師）６名（20 代５名, 30 代１名：民間企業経験者）を対象に，非直線型トランジション調査（2）では，シニア層教師（民間企業，主婦経験後，正規採用となった教師）６名（30 代１名，40 代４名，50 代１名）を対象に，ライフヒストリー調査を実施した。また補完調査として，臨床的アプローチによる教師調査と教師言説の受容に関する日台比較教師キャリアイメージ調査（日本と台湾の教職科目受講者調査：対象 1000 人）を実施した。臨床的アプローチ調査では，教師の多様な不安や仕事の不安定な状況に関するフィールドワーク（幼稚園から小学校移行期の「気がかりな子」への指導の連続性）とライフヒストリー配慮型学校経営研究（教師個々のライフを肯定することから始める教員研修）の二つ

を実施し，教職の多様性と多義性のさらなる探究を行った。

４．研究成果

本研究では大別して三つの研究成果が得られた。第一は，少数の教師を対象とした研究の意義づけと方法論である。第二は，非直線型キャリアに着目した研究による教職の多様性と多義性の検討である。第三は，混合法を用いて教師批判言説の課題を明らかにしたことである。

（1）少数の教師を対象にする研究枠組み・方法

まず教育社会学研究における教師研究の課題を検討し，教師研究に潜む政治性と質的調査の方法論上の課題の二つを明らかにした。

近年の教育改革には，「よい教師を養成し，研修するべき」という規範的判断とともに，「教師の成長」をアカウンタブル（説明可能）なものと捉える想定がある。そのため，教育社会学の教師研究も，ポストコロニアリズム課題を内包している。まず教育社会学研究における実証主義的アプローチは，研修と成長のリニアな関係を捉え直す目的で取り組まれてきた。しかしながら皮肉にもそれは，「教師の成長過程」を実証してきた歴史でもあった。なぜならば，組織的規範や価値あるいは同僚の文化への同調過程を社会化と捉えることにより，研修とは異なるプロセス（特にインフォーマルな側面）として「教師の成長過程」を描写してきたことには違いがなかったためである。つまり実証主義的アプローチのポストコロニアリズム課題とは，客観的に記述しているようにみえながら，研究者は教師の抑圧に加担せざるをえなくなってしまうという問題である。一方で，教育社会学における教師の質的研究に潜む政治性の問題が次に存在している。教育社会学の質的研究は，解釈主義的アプローチとして展開されてきており，解釈主義的アプローチは，「解釈者は解釈されるべきものを対象化」しており，「特権的な地位」に立っている（Schwandt 訳書 2006，172 頁）。このアプローチは，存在論に「リアリズム」，認識論に「客観主義」を採用している。そのため，研究者は「外部」の客観的な観察者に位置づけられる。この立場に立つと，研究者はフィールドワークにおいて，何らかの発見をしたことを記述するが，それは研究者の見方の投影にすぎない。例えば，アイデンティティやストラテジーの研究としてフィールドに入る時，すでに，アイデンティティとストラテジーを実存するものとして記述している。であるがゆえに，教師のアイデンティティやストラテジーは研究者の記述により実存物として成立してしまう。この政治性の問題が，質的調査の方法論上の課題と深く関わっているものの，教育社会学研究ではほとんど検討されていなかった。

この問題を考察する上で，教職ナラティヴに関する研究に着目し，研究枠組みと方法的規準を明らかにした。まずポストコロニアリズム課題を私たちが避けられないとしても，質的調査では，三つの思慮深さを重視して教師研究を展開する必要がある。第一は，研究に用いる概念の基礎づけに留意することである。第二は，解釈主義的アプローチと解釈学的アプローチを明確に意識した上で，研究を生産することである。第三は，研究者の実践にも関心を寄せることである。解釈主義的アプローチは，主体と客体，研究者と研究対象者，存在と認識とを分けて考えるが，ポストモダン以降の社会調査の議論は，より解釈学的アプローチへの傾斜を要請してきた。すなわち，解釈学的アプローチによる教師研究の重要性が浮かび上がってくると同時に，研究の方法的規準の問題が立ち現れる。

そこでナラティヴ理論に基づく調査方法を参考にすると，研究の規準の第一がナラティヴ・リアリティという研究対象の限定と認識論上の線引きである。これは，概念を実存物として解釈＝記述するのではなく，研究者と研究協力者の対話的な解釈実践と捉え，概念の実存や意味のリアリズムの解釈＝記述ではなく，「ナラティヴ・リアリティ」（構成過程）の解釈＝記述に徹することを意味する。この対象の限定と認識論上の線引きにより，少数を対象とする研究の意義が明確となる。

第二は，研究者の資源と研究協力者の資源の「透過性」を記述することである。これまで教師研究では，研究協力者のドキュメントのみが解釈の対象にされやすかったが，インタビューや解釈＝記述において，研究者の持ち込む資源（視点や論理）を明示した上で，研究協力者の視点や論理とともにナラティヴ・リアリティの構成過程を明らかにすることが求められる。

第三は，ドミナントストーリーへの疑問を抱かせ，多様な議論を誘発する研究成果を「テクストのヴァルネラビリティ」として，研究判断の規準にすることである。教育社会学領域の質的研究が解釈主義的アプローチに陥りやすい理由は，研究成果の一般化可能性，信頼性や妥当性といった実証主義的パラダイムの研究規準で成果を判断されることに起因している。そのため，解釈学的アプローチによる研究成果の判断規準を検討する必要があった。

この「ナラティヴ・リアリティ」の探求という研究対象の限定と認識論の線引き，方法的規準の明確化により，研究者と研究協力者の相互作用を研究の俎上に乗せ，研究者の政治的再帰性を検討する可能性が拡張される。研究に持ち込む概念（に伴う理論レンズ）や言説は，研究協力者との知見の共同製作過程に反映される。そのため，ポストコロニアリズム課題に対して，回避するまではいかなくとも，解釈＝記述の対象とすることは可能である。すなわち，研究対象の限定と認識論上の線引きを通じて，研究者の政治性を最小限化する，あるいは自覚的に研究の資源とすることが可能となりうることを本研究では理論的に明らかにした。

(2)教職の多様性と多義性の検討

本研究では，非直線型トランジションの経歴を持つ教師を対象としたライフヒストリー調査を実施し，先の研究枠組みと方法を用いて，「教師の成長」というドミナントストーリーの問題を検討した。この目的は，調査に先んじて有していたものではなく，教師のトランジション調査の過程で着想したものである。「教師の成長」を回答する難しさを表出する研究協力者にしばしば直面し，「教師の成長」そのものの課題に焦点を定め，「教師としての変容（教師になる／教師であること）」を解釈＝記述することとした。

その結果，非直線型トランジション調査（1）では，下に示すドキュメントのように，教職への移行とキャリア・トランジションは個別多様な偶発性を理由として構成されるリアリティであることを明らかにした。海外日本人学校でのキャリアについては，「海外生活経験」と「教師としての職務適性のお試し期間」としての魅力が語られていた。その上で，教職のイメージとして「厳しい職業」という準拠枠が，そのキャリア・トランジションのリアリティとして構成され，成長の実感を語る困難さが表出された。

A: 1つは海外に行きたいっていうのは，単純な動機。後は恩師だった先生が，アジアで活躍されていて，みてみたいっていう，思い。海外行きたい，日本人学校，その恩師の先生もいたっていうことで自然に，こう探してきたという感じですね。

また非直線型トランジション調査（2）では，教師としての成長を語る困難と同時に，教師としての変容は，社会文化的な文脈，学校現場の組織的制度的文脈に拘束されて意義づけられる＜教師のライフ＞そのものを意味することを明らかにした。

例えば，教師としての成長や変容を表出する「自己変容」語りのドキュメントに焦点を絞り，そのリアリティ構成を検討した。結論から述べると，教師の成長の＜語り＞は制度的，家族的，社会的，文化的ナラティヴへの埋め込み化の過程であり，個別的あるいは関係的な正当性しか持ちえないことを明らかにした。

下に示すように，今泉先生（仮名）は，教員になった当初，「場違い感」を感じつつも，「早くいい先生」になりたいと「ガツガツ」していたと語る。しかしながら，そういった「場違い感」を感じなくなった時期は，ようやく最近，今の小学校に移った2，3年前であったと語る。

I「先生の中である種，教壇に立ってることとか，職員室にいることの場違い感とか，わりとしっくりした時期はどの時期ぐらいからですか？」

今泉「あー，それはですね。今の学校に移ってきてからですね。だから，3年ぐらい前ですか？2 年ちょっと前ですかね。（中略）あんまガツガツしなくなったですもんね，今は。望まれたところに私頑張りますっていうスタンスでやる時期ですね，ある時期から。（中略）余裕がでてきたのかもしれないですね」

キャリアとは，自己の経歴に関する遡及的再解釈であり，それは，語らせる者と語る者の共同作業を通じた解釈実践を意味する。この意味では，普段あまり考えたことのない「教師としての成長」を語らせるインタビュアーに対して，「成長」のリアリティを構成する言語的資源と方向づけが用いられる。そのため，「教師としての成長」は，現在を起点として再構成される個別的関係的な「ナラティヴ・リアリティ」として立ち現れる。

「教師の成長」のリアリティとは，実践的に細分化された資質能力の向上ではなく，次の二つを表象している。第一は，「教師の成長」という概念を持ち込んだ際に構成される，個別的関係的なリアリティである。本研究は，制度的ナラティヴに埋め込む先生，家族的あるいは制度的ナラティヴに埋め込む先生，社会的文化的ナラティヴに埋め込む先生との相互作用の生成を描いた。すなわち，教職ナラティヴのリアリティ構成は，研究協力者と研究者両方の経験の語りの内容や質を反映し，経験のストーリーを社会的，文化的，家族的，そして制度的ナラティヴに埋め込む方法を反映する（Clandinin2013），個別的関係的なものであった。第二は，立場や年齢の変化に示されるように，社会的に要求される教職への調整と社会的自己の認知の変容の文脈的拘束性である。本調査で出会った教員の大半は，教師として成長する目的的な自己実現ではなく，目の前の子どもや仕事をする上で直面する多様な社会的文脈において，結果としての変容を語っているにすぎない。

この結果は，「教師の成長」のリアリティを語る正当性が，教師や私たち研究者には，個別的かつ関係的に付与されているに過ぎないという問題をさらに深刻化させる。「不確実性」とは教師に特有な職務特性ではなく，考えてみれば，ほとんどの職業にあてはまるものに違いないはずである。それが言及されないのは，「成長」のリアリティを構成する必要のなさにあるのではないか。これに対して，教職では，成長のリアリティを構成しようとするゆえに，不確実性が立ち現れる。すなわち，教職の不確実性は，教育改革のエビデンス希求に対してアカウンタブル（説明可能）なものとして答えようとする時に，さらに強化されうることを本研究結果が示唆していることなどを明らかにした。

(3)混合法を用いた総合的分析による教師批判言説の課題

教師の職務やキャリアに関するイメージ調査では，結果を要約すると二つがあげられる。第

一に，日本の教職科目受講者においては，教師に関する批判的な言説の影響が高く，教職の多忙感や報われなさを強く感じている。第二に，教師の仕事や成長に必要な学習では，「子どもとふれあう経験」に関する高い回答から実践経験主義の言説と人間主義の言説を準拠枠として教職を捉えていることが明らかになった。と同時に，教職の専門性に関する学習の重要性がそれに次いで回答されており，現在の教師の資質能力向上に関する言説が強い準拠枠となっている可能性も明らかになった。

表１は,日本と台湾の教職イメージに関する項目のデータをクロス集計した結果である。効果量(effect size)と有意確率に着目した時，教師のやりがいと同時に多忙感を日本の大学生は比較的に強く有している。これに対して，台湾の大学生は「休みの多い仕事」「尊敬される仕事」というイメージを有している。日本では，「教師の責任の重さ」「多忙感」といった教育言説を教職科目受講学生が強く受容し，教職の解釈枠組みとなっていることを表している。しかしながら，それは教師のやりがいを同時に感じるからこそ生じている両義性である可能性が表１に示されている。

表１　教師の職務イメージ日台比較分析

		とても あてはまる	少し あてはまる	どちらでも ない	あまり あてはまら ない	全く あてはまら ない	合計% (人数)	Cramer's V	p値
２－1 教師という仕事の責任は重い。	日本	83.3%	14.8%	0.9%	1.0%	0.0%	100.0% (681)	0.190	***
	台湾	68.4%	28.3%	3.3%	0.0%	0.0%	100.0% (272)		
	合計	79.0%	18.7%	1.6%	0.7%	0.0%	100.0% (953)		
２－2 教師という仕事は忙しい職業である。	日本	85.0%	12.2%	2.2%	0.4%	0.1%	100.0% (681)	0.447	***
	台湾	41.9%	41.2%	15.8%	1.1%	0.0%	100.0% (272)		
	合計	72.7%	20.5%	6.1%	0.6%	0.1%	100.0% (953)		
２－3 子どものためになる仕事である。	日本	72.7%	21.9%	4.3%	0.9%	0.3%	100.0% (681)	0.324	***
	台湾	42.3%	34.2%	17.3%	5.1%	1.1%	100.0% (272)		
	合計	64.0%	25.4%	8.0%	2.1%	0.5%	100.0% (953)		
２－4 苦労しても報われない仕事である。	日本	8.4%	28.0%	25.6%	29.7%	8.4%	100.0% (681)	0.279	***
	台湾	3.7%	5.5%	34.9%	40.4%	15.4%	100.0% (272)		
	合計	7.0%	21.6%	28.2%	32.7%	10.4%	100.0% (953)		
２－7 教師はみんなから尊敬される仕事である。	日本	15.0%	32.0%	34.9%	15.3%	2.8%	100.0% (681)	0.243	***
	台湾	33.8%	31.6%	28.7%	4.4%	1.5%	100.0% (272)		
	合計	20.4%	31.9%	33.2%	12.2%	2.4%	100.0% (953)		
２－10 休みが多い仕事である。	日本	1.9%	4.4%	18.4%	37.7%	37.6%	100.0% (681)	0.547	***
	台湾	11.4%	24.3%	45.6%	16.5%	2.2%	100.0% (272)		
	合計	4.6%	10.1%	26.1%	31.7%	27.5%	100.0% (953)		
２－14 教師になると私生活が制限される。	日本	32.5%	47.3%	14.1%	5.4%	0.7%	100.0% (681)	0.359	***
	台湾	16.3%	22.5%	43.1%	15.0%	3.1%	100.0% (160)		
	合計	29.4%	42.6%	19.6%	7.3%	1.2%	100.0% (841)		

これらの調査は，教職ナラティヴに着目した＜リアリティの探求＞により，実証主義的アプローチや解釈主義的アプローチとは異なる視座,すなわち教員の資質能力を要求し、標準化し、可視化しようとする試み（直線型マスターナラティヴ）が、教職の多様性や多義性を捨象し、かえって、教職の魅力を奪わせたり、教職の不確実性を増大したりしていることを明らかにした。本研究は、これを教育社会学としての「現場を異化する力」につながる臨床的アプローチの可能性として言及した。

なお，臨床的アプローチの具体的実践の可能性として，特別支援教育の重要性の広がりにより変容する幼稚園教諭と小学校低学年教諭の指導文化のリアリティ構成に着目した研究（野本・伊勢本・宮下・白松 2018）や教師のライフヒストリーに配慮した教員養成プログラム・校内研修の開発などを実施し，その応用可能性を探究した。

引用・参考文献

安藤知子，2000,「『教師の成長』概念の再検討」『学校経営研究』25，99-121 頁。
Kumashiro, K.K(2012), *Bad Teacher!: How Blaming Teachers Distorts the Biggest Picture*, Teachers College Press.
Schwandt, Thomas.A.,2000, “Three Epistemological Stances for Qualitative Inquiry; Interpretivism, Hermeneutics, and Social Constructionism” Denzin, Norman. K and Yvonna S. Lincoln.,2000, *Handbook of Qualitative Research*, second edition, pp.189-214, Sage Publications,（=2006，古賀正義訳「質的探究の３つの認識論的立場：解釈主義・解釈学・社会構築主義」，平山満義監訳，『質的研究ハンドブック』，北大路書房，１巻，167-192 頁）．
山田浩之,2013，「『教員の資質低下』という幻想」『教育学研究』80(4)，453-465 頁。
油布佐和子,2013，「教師教育改革の課題」『教育学研究』80(4)，478-490 頁。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①白松賢（2019）「解釈学的アプローチによる教師研究の可能性　–教職ナラティヴを通じたリアリティ構成に着目して–」『教育社会学研究』，査読有，104，印刷中。

②白松賢（2019）「教職キャリアイメージと準拠枠　–教職科目受講生調査を中心に–」『教

育学研究紀要(中国四国教育学会 CD-ROM 版)』，査読無，64， 210-215。
③野本星来，伊勢本大，宮下絢，白松賢（2018） 「就学移行期における指導の連続性と一貫性 −『気がかりな子』の資源化実践に着目して−」『子ども社会研究』，査読有，24，135-150。

〔学会発表〕（計 7 件）
①白松賢，「教職の人間主義とキャリアイメージ」，中国四国教育学会第 70 回大会，2018。
② SHIRAMATSU Satoshi，“Possibility of Narrative Research on Teachers’ Work and Professional Growth”, Talent Recruitment, Policy Publishing, Achievement Exhibition and Project Matchmaking; Elites Summit Forum: Educational Innovation and Development (鄭州大学,中国)(招待講演)，2018.
③白松賢，「質的研究法による教師研究のアプローチ −教師ナラティヴへの着目と可能性−」，日本教育社会学会第 70 回大会，2018。
④ISHIZAKI Koichiro and SHIRAMATSU Satoshi，“School Management Based on Teacher’s Life History: Open up a possibility of the Clinical Sociology of Education”, The 23nd Taiwan Forum on Sociology of Education, National Taitung University, 2017.
⑤SHIRAMATSU Satoshi，“Life Historical Meanings of Young Japanese Teachers’ Teaching Experience Overseas”, HICE2017 (Hawaii International Conference on Education)，2017.
⑥SHIRAMATSU Satoshi，“Curriculum Reform for Ehime University Faculty Members and Student Transformations; Using Life Historical Analysis as an Example (Collaborative Teacher Education with Local Communities; Panel Discussion)”, JUSTEC2016 (Japan-U.S. Teacher Education Consortium) (招待発表)，2016.
⑦白松賢「非直線型キャリアとしての教職の多元的保障 −ライフヒストリー研究の可能性−」，日本教育社会学会第 68 回大会，2016 年。

６．研究組織
(1)研究分担者：なし
(2)研究協力者
研究協力者氏名：長谷川祐介
ローマ字氏名：Hasegawa Yusuke
研究協力者氏名：伊勢本大
ローマ字氏名：Isemoto Dai